令和８年度

園評価

兵庫教育大学　鈴木正敏先生

R8 年 9 月 16 日

●総合評価

園庭では季節の草花や木々が整備され、夏から秋への季節の移り変わりを肌で感じられるよう工夫されていた。イチジクの葉っぱの形や実が大きくなって色づく様子などの生長を日々の生活で感じ、実りを喜びながら収穫までを身近に体験できていた。また木々の周りには季節によって異なる虫があつまり、観察を楽しみながら生き物がすむ自然に気が付く環境になっていた。

また雨上がりにも水たまりの中で泥の感触や水の冷たさなど全身の感覚（視覚・聴覚・触覚）を活用して遊んでいる。雨樋を使って水を流しながら「どうして水が流れるのだろう」「水のスピードをつけるにはどうすればいいのだろう」と探求心・好奇心をくすぐりながら保育が展開されていた。自然の中で科学的な探求やごっこ遊びを発展させながら、幼児期まで育ってほしい思考力の芽生えや豊かな感性と表現が養えるような教育実践を期待している。

●特に評価の高い、園の良さ等

自由に遊びを選ぶことのできる環境の中で、主体的な学びにつながっている。人的・物的環境を通して自分の得意や興味がいきいきとした遊びの中で学びに向かう土台作りとなっていた。また、人間関係が同質の集団内にとどまらず、年上の子への憧れや年下の子への思いやりなど縦割り保育の中で育っている。また個別の興味関心についてもクラス全体で対話をしながら子どもたちが納得して協働性を育んでいた。

●課題・改善が求められる点

文字への興味・関心の中で、正しい表記でない場合、自分らしさを指摘せずにいかにして「正しさ」を伝えていくかが課題となる。絵本作り・ポスター作りなど誰かに見せる必然性を遊びの中で見出しながら正しい文字を自分から書きたくなるような保育設定が求められる。書きたい気持ちが育つ中で、達成感を大事にしながら正しい文字の認識を伝える機会があることを期待する。

●第三者評価結果に対する法人・施設のコメント

幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿を意識した保育の積み重ねの中で、子どもが自ら挑戦し考え生きる力を発揮していると評価していただいた。園での遊びや生活そのものを子どもの育ちとして具体的に共有するため、また幼児教育と小学校教育との円滑な接続を行うためにも、子どもに関わる全ての職員が「10 の姿」を共有し、保育・教育の質が向上するように力を注ぎたい。